

敗者の側から幕末維新史を振り返る——会津藩や徳川慶喜はなぜ敗れたのか——

家 近 良 樹

はじめに

こんにちは。最初にちよつとお断りしますが、私、ここで喋るのは実は初めてです。以前、授業で一度、使えと言われたんですが、こういう収容人員の多いところで授業するというのは、考えただけでも恐ろしいことだったので、やらなかつたんですね。それに、私このような所で喋る立場には絶対ならないという、堅い決心をして今まで生きてきたんですけども、どういう間違いか知りませんが、ここで喋らないといけなくなりまして、ちよつと当惑してる

んです。

それから、こういうことを申し上げたらいけないのかもしれないんですが、私、実はピンチヒッターなんです。とある大学のとある先生が、体調不良で喋れないということで、「おまえがやれ」ということになりまして、後でちよつとそういう話になるかしれませんが、私も体調不良でして、体調不良の人の後に体調不良者が出てくるというのもどうかと思つたんですけども、ピンチヒッターのピンチヒッターはおりませんので引き受けました。むろん、引き受けた限りは、ちゃんとやろうというのが私の考え方で

す。

実はネタも無いんです。それで困りまして、急遽、今年、NHKの大河で、御存じのように会津藩のことをやってますので、それに引っ掛けて、考えついた苦心の題名が、先ほど紹介がありましたものです。こういうタイトルでちょっとやってみようと思いました。今まで喋ったことかなりあるんですが、これまで喋ったことのないものも少しはあるんです。それを中心にして、今日、私に与えられた責めを果たしたいと考えています。

今日はレジュメ（本文末に掲載―編集委員会注）を五枚用意したんですが、途中で順番を変えて話をしようと思えます。というのは、一番言いたいのが三でして、だから、一、二、三という形で行けば、ひよっとしたら三の前で時間切れになるという可能性もあるので、一、二、三という順番じゃなくて、一、三、二という順番でお話をしようと思います。

一 幕末史研究の推移と現在の研究状況

（1）長年の研究の特色（一九九〇年代半ば頃まで）

それで、ちょっと煩わしいんですがお配りしましたレ

ジュメの1を見てください。なぜ会津藩のことを、今年NHKが取り上げるようになったのか、その背景から御話したいと思います。

まず、幕末史研究の推移と現在の研究状況ということで、非常にアバウトに、日本の歴史の中での一時期に当たる幕末史に関して、これまで、こういう研究がなされてきたんだという話をします。その①のところを書きましたように、長年の研究の特色ということで、一九九〇年代の半ば頃まで、だから、今から二〇年ほど前ぐらいまでなんですけど、この二〇年ぐらいの間に幕末史研究というのは、それはもう随分変わったんです。本当に隔世の感があるというんですか、それぐらい変わりました。そして、これが、今、NHKの大河で会津藩のことを取り上げることにつながったんですね。

何年前にも新選組が取り上げられましたが、その前には徳川慶喜も取り上げられました。昔だったら考えられないことです。徳川慶喜とか新選組とか、あるいは会津藩で、一年間、大河がやられるということは、まず考えられなかった。

それが、この二〇年ほどの間の研究の変化・深化によつ

て、大きく変わった。NHKを初めとして、マスコミというの是非常に現金ですから、もう世の中の動向を見て、変えるんですね。マスコミというのはそういう変わり身がある意味では早くなかったらやつていけないところがあるもんですから、やっぱりそういう面では、凄いもんだと思います。

では、今から二〇年ほど前ぐらいまでは、どんな状況であったかと言いましたら、レジュメの⑦に書きましたように、幕府側は負けるべくして負けたといった見方が支配的だったんです。それは要するに、後でも申し上げます、幕末史というのは基本的に言えば薩摩とか長州が勝者で、幕府とか会津藩なんかは敗者だということになっており、敗者側への低い評価が一貫してたということが長い間あったわけですね。

それと裏表なんですけども、①に書きましたように、西南諸藩というのは、ここでは薩摩それから長州、土佐といった藩ですね。こういう藩の研究が中心を占めていたんです。特に長州藩の研究が盛んだったんです。

理由は何故かと言いましたら、史料があるんです。山口市には立派な文書館がありまして、物すごく膨大な、五万

点でしたか、そういう膨大な史料があるんです。私も一度書庫の中に入ったことがあります、とにかく物すごい量です。もう見た途端にやる気をなくします。だって、どんなに頑張っても見れる量ははしれているんですから。もうファイトを失うぐらい、物すごい膨大な量の史料があるんです。やっぱり研究というのは、当たり前のことかもしれませんが、史料があるところに集中するんですね。それで、長州藩を分析して、そこから日本の幕末史一般の話の導き出すということになっていったんですね。

それなら、薩摩藩はどうかということですよ。薩摩藩の研究はやられていたのかと言いましたら、薩摩藩の研究というのはもう随分長い間、低調だったんですね。何故かと言いましたら、薩摩側の史料が無いんです。薩摩藩の史料はいろんな理由で失われたんです。⁽¹⁾一番大きいのは、やはり西南戦争です。西南戦争というのは、もちろん人材が失われたというのが大きいんですけど、我々研究する側からしましたら、やっぱり良質な史料が西南戦争によって焼けたということが大きい。

それから、いま一つは、薩摩藩においては、古い時代、江戸時代ですね、この時代が良くなかったんだという見方

が、明治以降非常に強くなりまして、古い時代のことなんか判ってもしょうがないというので、意図的に史料が廃棄されたという面もありまして、史料が無いんです。意外に無いんですよ。だから、薩長、薩長、と言いながら、圧倒的に長州藩の研究しか、これまでやられてこなかったわけです。

いっぽう会津藩です。これはもつと無いです。私、当然のことながら、もう何度も会津若松に行つて、会津若松の市立図書館なんかにも行きまして、図書館で刊本になっていない、いわゆる活字になっていない史料がありますね、それを全部見ました。

逆に言いましたら、一人の人間が何年間にまたがつて行つて見られるぐらいの量です。それぐらい史料が無いんです。会津関係の史料というのは本当に少ないですよ。もちろん、東京とか、いろんなところの大学に、一部入ってますけど、基本的には物すごく少ないです。しかも、そういうのは、大体、活字になってます。⁽²⁾だから、長州藩を中心とした研究が圧倒的に主流を占めていたんですね。

それで、今度は、㊦ですけれども、その中で敗者側、これは先ほども申し上げましたが、幕府とか会津藩など、扶

幕勢力です。扶というのは助けるという意味なんです。だから扶幕勢力とは、幕府を助ける政治勢力という意味です。

それから、他に中間派諸藩があります。どっちつかずというのか、悪い言葉で言いましたら日和見ですね、そういう藩の研究は活発でなかったということです。そのような研究状況の中で特に、㊥に書きましたように、会津藩というのは悪役、脇役として、主役の薩長両藩の引き立て役を務めるといふ、身も蓋もない書き方をしましたが、脇役、悪役として、非常にひどい扱いを受けてきたわけです。

それで、次に、そういう中で、㊦に書きましたけれども、薩長両藩対徳川勢力という対立の図式で幕末史を見るといふ、こういう見方が、俗に言う薩長同盟史観というものですね。これは、薩長両藩の協力によって明治維新がなったとの見方、これはいまだに圧倒的に強いです。

私はこの見方に対して異議を唱えているんですが、つまり慶応二年の正（一）月に結ばれた薩長同盟（いまは盟約といわれることが多いです）は大したこと無かったと言っているんですけど、私ぐらいですね、こんなこと言っているのは。そういう考え方を持つてる人間は他にはいないです。

私は、だから、非常に嫌われ者なんです。もともと、私の

場合、確信を持って嫌われ者を演じてるところもあるんですけど、それはともかく、一般の幕末史においては薩長同盟史観が根底にあるわけです。

念のため、薩長同盟史観について、もう少し説明しますと、こういう見方だということで、史料のナンバー4の注のAの所を開いていただけますか。これは一般の方々が皆さん持つてる、もう国民的常識というものなんですけど、こういう見方ですね。つまり、一六〇〇年に有名な関ヶ原の戦いがありました。徳川方と豊臣方に分かれて戦った、日本史上で最も有名な戦いですね。この戦いに薩摩藩とか長州藩が敗北して、ひどい目に遭う。長州なんかは中国地方全体の領主だったのが、今の山口県一帯に押し込められた。そういう史実があるわけです。

そこで薩摩とか長州といった外様諸藩は、いつか機会があったら、徳川幕府を倒そうと、二百数十年間チャンスがうかがっていたと見る。これは司馬遼太郎さんなんか、エッセイとか小説とかで幕末関係を描くときの前提としていた見方です。

そういう中で、一八五三年にペリーがやってきまして、日本に開国を迫る。ついで、開国か鎖国かということで、

孝明天皇を巻き込んで、大変な抗争が始まるわけですね。つまり動乱状態になっていく。そして、こうしたことを受けて、一八六〇年代の初めに、長州と薩摩の両藩が中央政局に登場してくる。これは誰もが知ってることですね。

ところが、薩摩も長州も両雄並び立たずということで両藩が対立する。非常に深刻な対立が起こるわけですが、その中で一八六六年、日本の年号で言えば慶応二年という年に、土佐の浪士であった有名な坂本龍馬が間に立って、いわゆる薩長同盟というのが結ばれて、これ以後、薩長両藩による武力倒幕へ向けての活動が開始されて、一八六八年に徳川幕府が打倒される。

非常に短い纏め方をすると、こういう理解の仕方がいわゆる薩長同盟史観というものなんです。そして、これが国民のほぼ一〇〇%が信じて疑わない幕末の常識かと思うんですが、とにかく、これがずっと明治以後、教科書とか映画とかドラマとか小説、そういったものによって、繰り返し繰り返し国民の頭に刷り込まれていった。そして、今でも、これは圧倒的に有力な見方であるわけです。

では、何故こういうことになったのか。この前提には、幕末史研究からは、もう何も新しい成果は生まれないと

いった考え方が支配的であったことが、やはり大きく関係していると思います。言い換えれば、それだけ薩長同盟史観が常識で、誰も疑問を抱かなかつた。すくなくとも、私なんか幕末史研究をやり出した頃はまさにそうでした。

ちよつと意外に思われるかもしれませんが、実は昔、幕末史研究というのは非常に不振だつたんです。我々が学生時代の頃は、幕末史研究というのは本当に不振でした。何かといつたら、先程も申し上げたように、もう新しいものは何も出ないというのが、学生みんなの常識だつたんですね。

その代わり、維新史ですね。明治以後の歴史の方を若い人たちはみんなやってたんです。本当に幕末期をやってる人が少なくなつたんです。幕末をやってる人間は変わり者でしたね。それはどういふことかと言うと、「おまえ、そんな所をやつたつて、新しいものが生まれるんだ」みたいな、そういう冷やかな視線を浴びたこともあるんです。

ところが、今は違ふんです。今は幕末史(特に政治史)研究に若い人は、みんな行きます。反対に維新史研究ですね、例えば廃藩置県とか、そつちの方をやる人が本当に少なくなつてゐるんです。だから、ここ二〇年ほどの間だけ

でも随分変わるもんだなと思うんですけど、幕末史研究なんかする人間はいなかつたんですね、正直言いましてね。

そうした中で、薩長同盟史観がなぜ常識そのものにまでなつてきたかといへば、他の要因としては、マルクス主義史観という独特の歴史観の影響力がやはり大きかつたと思います。これは年配の方が多いので解ると思いますが、第二次世界大戦後、圧倒的に大きな影響力を持つた歴史観です。このレジユメ中に発展史観と書きましたけれども、マルクス主義がなぜ多くの人たちの気持ちを引き寄せたかといへば、希望を持てたんですよ。発展史観で社会がどんなより良くなつていくというね。

発展史観というのは、要するに、ここではマルクス主義の詳しい話はできませんけど、常に勝者と敗者という二つの政治勢力を設定して、両者を闘わせるわけです。当然、一方が勝ち他方が負けますね。その勝者が次の新しいステップに行く、すると、またそこで対立抗争が生じて、続いてまた新しい勝者が出てくるという形で、勝者が常に新しい時代を切り開いていくという考え方です。これが発展史観なんです。だから、限りなく歴史が進歩していくという形になり、多くの人の気持ちを引き寄せたんだと思ひ

ます。ネガティブじゃなかったんですね。

ところが、それだけに、どうしても勝者に、勝った方に着目するという、非常に大きな特色が、私はあったと思います。だから、負けた方に対しては、負けたのはそれだけの存在だからということで、振り返る価値をそれほど認めなかった面が、私はあったと思う。だから、一九九〇年代半ば頃まで、敗者側、会津藩なんかを含めた敗者側に対する研究が進まなかったのは、私はそういう大きな背景があったと思います。

(2) 一九九〇年代半ば頃以降の特色

そういう中から、一九九〇年代の半ば以降ぐらいから、様子が変わってきたと言えるかと思います。ちよつと口にするのが憚られるんですけど、その口火を切った一人が、私なんかであったのかもしれませんが。

いずれにせよ、ちよつと様子が変わってきました、幕末史研究の場合、レジュメの㊦の㊧のところを書いておりますように、まず一会桑勢力への注目といったことになりました。この一会桑に関しては、私が一番最初に言い出したんじゃないのですが、広めたのは私かもしれません。だけ

れど、もともと言葉としてはあったんです。実は私、幕末史研究をやり出したときに、最初になぜ一会桑に注目したかと言いましたら、これには、わけがあるのです。

私、自分の恥をさらすようですが、随分、長い間、定職につけなかった人間なんです。この大学に私、採用されたのが四二歳の時なんです。その前、数年間、ある中高一貫の私立校に専任でいました。これは偶然に採用されたんです。なぜ採用されたかと申しましたら、一九八五年に日航機が落ちたんです、御巢鷹山に。私は、たまたまその時、その中高一貫校に、もう三〇代半ばでしたけれども、非常勤で勤めていたんです。その日航機、落ちたときに社会科学の先生が二人亡くなった。その人が担当していた学年に専任教諭で入らないかと言われたんです。私はその学年は教えたこと一度も無かったんですが、「社会科の教員が全員一致して君を推しているから」というので、校長さんに言われて、私も三〇代半ばで、定職に就いていなかった身ですから、ありがたく御受けして、亡くなった人が担当していたクラスの担任をしました。私、大体、物覚えが非常に悪いんですけど、そのクラスだけは覚えてます。高校一年のGクラス。

その時、最初は、亡くなった人の思い出が生徒にはあるから、いじわるされるかなと思っただけです。だけど、いま

思い出しても非常に有り難いんですが、卒業まで二年半、一度も生徒諸君から嫌な思いをさせられたこと無いんです。これはいまでも私、非常に感謝してるんですね。もつとも見方を変えれば、私が鈍かったということもあるのかも知れませんが、まあ、それはそれでよしとしようと思います。

ついでに申し上げますと、おととい、その時の卒業生がうちの大学に来ました。会社の人事を担当しているらしく、学生への説明会で来たというんです。そこで、「先生の授業に合わせて、私、来ました」みたいな話をして、「おう、懐かしいな」といった会話を交わしました。別に、懐かしいはなかったんですけど、何年か前に自宅に来たぐらいですからね。

思わず協道にそれてしまいました。とにかく、就職がなかなか出来なかったんです。その時に、これもはつきり言います、私、出身大学の指導教授と喧嘩したんです。「先生の学問は面白くない」と言ったために、えらい響壁ひんしげを買いました、私はもうおれなくなっただけです。先ほど所長の方から説明がありましたけど、私、学位を出身大学と違う

ところで取ってるでしょう。何故か。私も意地がありました、外部で学位を取りました。

そういう訳で、私、出身大学にも近寄れないし、史料を読むのにも大変苦労することになったんですね。ところが、若い時に、私、本だけは買ってました。これは涙ぐましいんですよ。私は古本屋通いを若い時にごっついやってたんです。あるとき、今でも覚えてるんですけど、京都の北山というところに古本屋があったんですけど、そこで、本を買って、京都駅まで出ないといけないのが、バス代一〇円が足りなかったんです。そのため、北山通りから京都駅まで歩いたことがあります。一〇円玉を探しながら。そういう時に限って見つからないんですね。そうでないときは、一〇円玉が落ちていたりしてるんですけどね。

とにかく、古本屋で本を買ってたんです。刊本を買ってたんです。日本史籍協会叢書みたいなものをね。結局、大学に縁がないでしょう。それで、家にある本をじっくり何回も何十回も見ないでしょうがないんですよ。その中に会津藩の記録があったんですね。『会津藩庁記録』という全六巻本³。それを、ずっと読んでたんです。

そしたら、そのうちだんだん、幕末史というのは会津藩

だなどと思いつつたんです。「やつぱり会津藩がいろんな意味で圧倒的に大きな影響力を持つてるな」というのが自然とわかってくるんです。ところが、会津藩のことを、それまで誰も本格的にやっていなかった。

そういう中で、会津藩を中心にしてやり出しました。ついで、一会桑勢力というものに改めて注目しました。レジュメ中に書きましたように、禁裏御守衛総督兼摂海防禦指揮に就任した一橋慶喜、藩主の松平容保が京都守護職になった会津藩、藩主の松平定敬（容保の実弟です）が京都所司代になった桑名藩、この三者によって構成された政治勢力です。要するに、彼らは、江戸から京都にやって来て、京都で政治活動をするわけですね。今まで一会桑勢力に関して注目がほとんど集まらなかったのは、なぜかと言いましたら、この連中は全部、幕府方だとなっていて、慶喜の動きも容保の動きも定敬の動きも、つまり会津藩の動きも桑名藩の動きも全部、幕府側の動向ということで分析されてきたんですね。

ところが、私はやってるうちに、いや違うと思った。この連中は江戸から京都に来て、京都で天皇とか関白とか、それから上層公卿とか伝奏とか議奏とかと接触する中で、

京都にいないと分からなかったことに出くわす。つまり、江戸の幕府の指令を伝えるだけでは、京都の朝廷関係者と折り合いがつかないわけです。そういう中で独自の動きをする。もちろん、全く幕府と離れてということは無いですよ。だけど、幕府側ではあるんだけど、自分たちの判断で動かねばならないことが、いっぱい出てくるんです。

そうしたことが判ったもんだから、これは一つの政治勢力として、それなりに分析する必要があるなということに気付かされました。そこから私もちょっと、やれるんじゃないかなと思つたんです。これは、逆に言いましたら、私の冷遇された時代が助けてくれたんです。私、こんなことをあえて、もう人の前で喋ることはそんなに無いと思いませんので、なにしろ「あの世」が限りなく近いもんですから、この際もう洗いざらい言いますけど、よくピンチがチャンスになると言うことを言うじゃないですか。本当にそうですよ。私は心底そう思うんです、この年になってね。ピンチがチャンスになると思います。チャンスばっかり与えられた人は逞しく無いですね。危機に直面したことが無い人は駄目ですわ。それはともかく、こういうことで一会桑勢力に注目して、そこから私の人生、道が開けたんです。

それでね、一九九〇年代の半ばに、私、最初の本を出して、これがちょっと注目されて、その後、新書⁽⁵⁾を出したこともあって、一会桑という言葉が、だんだん市民権を得てきました。これは、たまたまなんです、NHKの大河ドラマで新選組が取り上げられた時に、普段、私、ドラマなど見ないんですけども、たまたまテレビをつけたときに、一会桑という言葉の説明をしてましてね、感動しました。一会桑というのは、どういうものかみたいなことを、ドラマの中で説明してまして、その時は非常にありがたいと思いましたね。それと同時に、時代が追い付いてきたなというのを、その時に感じたんです。

その頃からちょっと感じが変わってきました、一会桑勢力への注目度がぐんとアップしました。ついで、在京幕閣というものが、これは、京都、大阪にやってきた幕府の老中のことですね、京都、大阪にとどまっていた老中ですね、こういう連中の動向にも光があたりました。板倉勝静なんかがそうなんですけども、こういうた人たちに対する注目が集まってきて、研究がなされるようになってきました。

それから、レジュメの⑤に挙げたように、朝廷や朝廷関係者への注目も生まれてくる。それまでほとんどやられて

いなかった朝廷本体とか朝廷関係者の分析が、この頃から本格化してくるわけですね。私もこういう方面の研究には、教えられることが実に多かったです。

つづいて、当時、私が注目し、主張した点について、レジュメ中に、アバウトなことをちょっと書きました。その中で、⑥に幕末期の会津藩が脇役などではなく、主役、しかも飛びつきの主役だったということが書いてあります。これは、私からしたら極めて当たり前のことなんですけども、当時はそうじゃなかったんですね。

それから、⑦に会津藩の動向を軸にして分析しなければ、幕末史というのは理解できないと書きました。つまり、会津藩を筆頭に、敗者側の動向を正當に視野に入れる必要があるんだと。なぜなら、勝者は常に敗者の動向を視野に入れて動くんです。

明治以後、薩長が権力を握る中で、要するに会津藩なんかは吹けば飛ぶような存在で、守旧的な、つまり古いものにしがみついた馬鹿なやつらだと見なされた。言い換えれば、取り上げるに値しないみたいな扱いをされていくんですけど、薩摩藩とか長州藩にしても、幕末期に主役だった会津藩がどう動くか、あるいは慶喜がどう動くか、それを

常に見ながら行動してるんですね。

後でまた時間があつたらお話ししますが、幕末史というのは一つの方向に、明確な方向に向かつて、歴史が動くということは絶対ないですよ。はつきり言えるのは、常にその時々状況、その都度その都度、起こってくる状況の中で、それに対応していろんな政治勢力が動くんです。その積み重ねが最後に倒幕になるんです。ストレートに武力倒幕に向けての動きがあつて、武力倒幕が達成されるなんてことは絶対ないです。いろんな状況が起こったとき、その状況の中でいろんな政治勢力がいろんな形で動く、その中で次の段階に移っていくんです。だから、状況主義的な分析をしないとわからないんです。

そういう意味では大変ですが、歴史の面白さというのは、私はここにあると思います。そんな単純じゃないところに非常な面白さが私はあると思うんですけどね。私はやらないうですけど、囲碁、将棋なんかのおもしろさにも通じるんだと思います。いろんな手があつて、その中でいろんな手を打つことによって状況が変わってくる。そうしたことと同じようなことが起こるんだと思うんですね。

次に、これは、今もやつてることなんです、幕府も、

朝廷も、会津藩も、薩長両藩も、一枚岩じゃないということ。何年か前に西郷に関する本を出して、新聞なんかにも大きく取り上げられたので、ひよっとしたら見ていただいた方もいるかもしれませんけれども、その本でも書きました。幕末期の薩摩藩と言えば、西郷隆盛が藩を引っ張ったみたいなイメージを皆さん持つてるんですよ。あたかも大久保とか西郷の意見が薩摩藩のそれみたいな。ですけど、実際はそんなことないですよ。あんな下級藩士あがりの連中に、自分たちの判断だけで薩摩藩を引っ張っていくということは出来ないです。

私は、その西郷本で書いたんですが、島津久光という、その当時の藩主の実の父親で、藩権力を握ってる人間がいるんです。やっぱり、この久光の顔を、あるいは考えを、見ながら動かざるを得ないんですね。

私からしたら当然のことだと思つてますが、一般の人はそうじゃないんですね。もう西郷がこう言つてた、だから薩摩藩はこう動いたんだみたいなの。すごく偉い先生でも同じような考え方ですけど、藩はそんな一枚岩じゃないです。藩内にいろんな考え方ありますし、薩摩藩が武力倒幕を藩の方針で決めたということは無いです。もしあつたとして

も、幕末の本当に最終段階です。慶応三年の一二月末です。幕府に対する軍事行動は、藩の存亡に即かわかりますから、失敗したときにはもちろん藩がなくなるだけではなくて、下手すると藩士及びその家族が全員、殺されますので、そんなこと容易に決定できません。英雄的な動きだけで歴史は動かないです。あるのは状況主義的な対応で、そうした中で新しい時代が形づくられていくということです。

実は、嫌らしいなと思われるかもしれませんが（実際、嫌らしいんですけど）、レジュメのナンバー2に、つい最近、高久嶺之介さんという、京都橘大学の先生で、私が非常に親しくしてる方が、私の本の書評⁽⁷⁾をしてくれたんです。これは、私の言わんとしてるところをうまく纏めてもらってるなどということ、高久さんの文章をちよつと読ませてもらいます。レジュメの注Bのところを見ていただけますか。ナンバー4の②の注Bです。

読みながら、ちよつと注釈を加えます。「これらの作品」というのは私の書いたものですけど「これらの作品から、家近作品の通底にあるものをまず指摘しておこう。第一は、氏が結果として幕末維新史の常識に挑戦する斬新な作品を生み出したとして」。まあ、こんなことないですけ

どね。「それは、手法としてひたすら愚直な史料読みから生まれたものであるということである」。

愚直な史料読みというのは、若い人も来られてるようなので、ここでちよつと申し添えておきます。私の史料読みというのは、もちろん歴史学ですから、史料が無かったらやれないんです。小説家と我々研究者のどこが違うかと言ったら、小説家はもう自由に空想で物を書けるんです。便利ですよ。何か言うときには、私はこう思うと書いたら、それで済むんです。ひどい人になってくると、「思う」と「考える」ばっかしのがあります。もうほとんど想像の世界でこの作家は生きてるんじゃないかと思うことすらあります。

我々は史料が無かったら絶対駄目なんです。ただ、その史料も多くの人は、自分にとつて都合のいい史料を、都合のいいところだけつなげるんです。これ、あえて言います。よく売れっ子の人はそういうことをやってます。私は売れてもいないから、こんなこと申し上げますが……。

私、嬉しかったのは、ここで高久さんが愚直だと書いてくれたことです。自分は本当に不器用なものですから、最初の方から全部、史料を読みます。最初の挨拶からさよ

うならの所まで。シャーペン持ってまして、人から見たら馬鹿じゃないかという感じでしょう。シャーペン持ってて、最初から読むんです。そうすると、今まで全然、注目されて無いところに、「あれ」という、おもしろいものを見つけることがあるんです。そうした姿勢が愚直ということなんです。もちろん、それ以外に愚かな面も多々あるんですけどね。それが、「氏の愚直を示すエピソードはあるが省略する」という高久さんの文章につながります。もう省略してくれて大助かりです。

昔からいろいろあるんです。若い時に、高久さんからよく言われました。「おまえは本当に損なことばかりをよくしてる」と。普通は、人の前に行ったら、よいしよする、気持ちがいいようにね。私、昔も今もそうなんですけど、陰で人の悪口言うの大嫌いなんです。格好いいでしょう、口だけは。私、面と向かって批判するんです。もちろん穏やかな調子ですが。すると、顔色変わる人、多いですよ。でも、私、それが一番親切だと思ってるんです。本当に心の底からそう思ってますからね。そういうことがあったんです。今はさすがに控えています。なぜか。やっぱり年齢を取って損だなと思うことが多くなったからです。でも、今

でも多少はやりませぬ。

ただ、私は名誉のために、あえて申し上げますが、安定した立場にある人、びくともしない立場にある人に対してだけです。若い人にはやりませぬ。何故かといったら、相手が弱い立場にあるのと、恨まれたら怖いですから。私は家近という珍しい名前です。それに子供もいます。私が批判して、子供たちの代に復讐されたらちよつとね。田中さんとか藤田さんとかいうのはいいんですよ、本当に。斉藤さんもいいです。羨ましくてしようがない。

横道にそれました。本道に戻ります。「歴史を描くという方法である。これまでの作品で言えば」、次がちよつと線を引きました。つまり、よく言ってくださったということですね。「江戸の幕府と京都の『一会桑』の違い」、これ先程言いましたね。

それから、「国許の会津藩と京都の会津藩の違い」、これも私、先程挙げました。同じ会津藩といっても、会津若松にいる連中と、京都に来た連中ではやはり思いが違ってくるんです。国許の連中は京都で馬鹿なことをすんな、危険なことをすんなというんだけど、京都に来た連中はやっぱり京都で孝明天皇なんか頼まれたりすると、そうはいか

ないですよ。見捨てて京都を去るわけにはいかない。そういうことを、私はかつてしつこく書いたんです。

「つまり幕府や藩を一枚岩では見ないという視点に表れている」。「第三は、等身大で人物を描こうとする姿勢（氏の表現では「英雄史観を排す）」である。たとえば、徳川慶喜を、朝幕双方にまたがる出自から来る朝廷を尊崇しながら幕府の中にいるという孤独で冷めた」男として描いたと。今日は時間の関係で、この点に関しては申し上げられませんが。今、私、慶喜に関して、三冊目の本を書かされてるので、来年正月に出たら、一度見て下さいとしか申し上げられません。

それから、「孝明天皇を、豪胆な攘夷主義者ではなく、周囲への配慮や優しさをみせ、重大な決断を迫られて苦悩する男として描いた」ということで、これは私、自分の特質だと思えますけど、英雄史観の立場じゃないんです。これはどういうことなんですかね。子供の時から出来も良くなかったこともあるのかしれませんけど、私、何か物すごく人に憧れたことないんです。寂しいんですけどね。ワーとかキヤーということが全く無くて、何かこれ、性分なんでしょうね。どんな歴史上の英雄でも普通に見えるんです。

どうしてか、皆、普通に見える。だから、西郷隆盛でもごく普通に見えます。悩み多き点もね。西郷が、おそらく、ある時点から、自分で意識して虚像を演じていったんだろかなといったことも、何となく解るような気がします。

私、英雄史観でなくて、ごく普通の人間として、もちろん慶喜もそうですけど、眺めていく。こういうスタンスで、今までやってきたわけですね。また元に戻りますね。ナンバー2の方に戻ります。いままで高久さんの拙著への書評を厚かましくも紹介したわけですが、とにかく、一九九〇年代半ばぐらいから幕末史を取り巻く研究状況が変わってきました。そして、NHKの大河ドラマで、ここ十数年の間に、徳川慶喜、新選組、会津藩が取り上げられるようになった。すなわち、ここ十数年の間に、今までだったら取り上げられなかった、勝者側の観点に立つ立場だったら取り上げられなかった、敗者側から歴史を見ていこうというようになってきた。その直接のきっかけの一つが、もちろん東日本震災ですけど、今年の大河で会津藩を取り上げるといって、そういうことになった大きな背景としては、以上のような流れがあるのです。

(3) 二〇〇〇年頃以降の特色

次、レジユメの③にある二〇〇〇年頃以降の特色という所に移ります。ここ一〇年ほどの間に、また新しい段階に来たと思います。つまり、より若い研究者たちの研究なんですけどね。⑦に書きましたように、中間派諸藩とか日を見諸藩ですね。鳥取藩とか加賀藩など、こういった藩のことをやる人が出てきました。

それから、①に挙げました徳川政権への注目。江戸の幕閣、これは老中のことですけども、江戸の幕閣の政治動向や彼らを支えていた思想構造の分析が始まっています。これも若い人たちが最近やっていることですね。

それから、⑤の東国諸藩や譜代大名、直参旗本層の実態の解明とか、つまり、今までだったら全くやられなかった政治勢力について、非常に詳細な研究を若い人がやるようになって、私なんかは、こういう若い人たちの研究を参考にして勉強させてもらってるんです。

そうした中、④のいま現在の研究の特色としては、政局中心の研究から離れた研究が登場してきています。政局中心というのは、私のような古い世代の研究なんです。それに對して、政治空間の問題なんかが、いま問題にさ

れ始めています。これ、どういうことかと申しましたら、どのような所で当時の人たちが話し合ったのか、関白とか慶喜とか、そういう人たちが京都御所のどういう場所で、どういう話をしたのかとか、つまり政治空間を問題にしているんです。例えば江戸城なんかだったら、譜代の溜間なまのま詰づめの連中は、こういう所で纏まって座っていたんだみたいな、そのような研究が今やられているということになります。

二 なぜ会津藩や徳川（一橋）慶喜は敗北したのか

次に順番からいえば二になりますが、これは最後に回します。最後にちょっと、今こういうことを考えてるんだみたいなことを、お話ししたいと思います。その前に、三に入ります。というのは、最近、強く考えたことがあるので、今まではこういう話をすることがありませんので、せっかくですから、今まで話をすることが無い話をやっぱり入れた方が良くと思ったので、急遽、入れたんです。

それは、なぜ会津藩や慶喜らが対幕強硬派の前に敗北したのかという問題です。これは、先ほどから申し上げてお

りますように、一番大きな理由は状況主義的な対応の中で彼らは敗北するようになったということです。それが一番大きいんです。ただ、今日はここでそんな話は出来ませんので、一つだけ今の私が思い当たることを皆様にお話ししたいと思っております。

(1) 確認しておきたい点

①の所を見て下さい。これ、幕末の最終段階なんです、ぜひ確認しておきたい点があるんです。それは、幕末史、最後は鳥羽伏見戦争になって、御存じのように、この戦争で旧幕府側が負けて、いわゆる官軍、薩長を中心とした官軍が勝利をおさめた。そして、この後、近代天皇制の成立ということになっていくわけですが、その鳥羽伏見戦争直前の段階では、慶喜は勝利をほぼ手中にしてたんですね。

だから、慶喜が新しくできる政府の中心に座る新しい国家が生まれた、そういう可能性がある。つまり、徳川幕府がああいう形で倒されなかったということです。慶応三年の一月一四日に、大政奉還を慶喜がし、それが翌日朝廷によって認可されます。その結果、徳川慶喜の評価がものすごく高まるんです。大体、想像がつくと思いますけど、

大政奉還、つまり政権返上を慶喜がやるなんてことは、その当時の日本人で具体的に考えてた人はいなかったんです。やったんです、慶喜。慶喜という人物は変わった人なんです。

その一つが何かと言いましたら、従来の將軍と全然違うんですよ。従来の將軍というのは老中任せなんです。老中とか若年寄任せなんです。よきに計らえという將軍なんです。慶喜というのは全然そうじゃないんです。自分の考え、自分の意思で、判断する將軍なんです。政治家將軍なんです。だから、この人はものすごく孤独なんです。非常に孤独です。だから、幕府内にも信頼できる人間がほとんどいないんですね。今日はその話はしませんけど、だから大政奉還がやれたんです。誰かに相談する、老中とかに相談してやる將軍だったら絶対、大政奉還は出来なかったです。彼は非常に孤独な將軍であったために、大政奉還という、当時、誰もが考えなかったことをやっただんです。

ところが、そのために、ものすごく評価が高くなるんですね。それで、実は、王政復古クーデターという有名なクーデターが大久保なんかによって仕組まれることになるわけです。では、なぜ大久保なんかが王政復古クーデター

をやったかといったら、いろんな理由があると思いますけど、私が重視したいのは、クーデター方式にこだわったという事です。何故こだわったかと言ったら、慶喜が大政奉還をした、新しい政府ができることが決まった、慶喜も当然、新しく出来る政府で要職に就くことになるだろう。だから、当時、なれ合い精神がすぐに充満するであろうことは十分に予測しえたんす。

ところが、大久保なんかからすれば、今度できる政府は今までの政府とは全然違うんだということ強烈にアピールしたいんですね。その時に、クーデター方式というものを彼らが必要としたんだろうと思います。私の考えはそうなんですけどね、誰も支持してくれません。

その王政復古クーデターですが、一二月九日にやられるんです。ところが、三日前に、このことは、ほとんどの人が知らないんですけど、慶喜は知らされてるんです。つまり、クーデターに参加する、徳川家の親藩であった福井藩の前の藩主だった松平春嶽という人物から、「クーデターをやりま⁽⁸⁾すよ」ということを知らされてるんです。潰そうと思つたら潰せたんですよ、慶喜は。だって、会津藩とかに言つたら、あるいは関白に言つたら簡単に潰せますよ。

クーデターは、関白などが御所から下がったからやれたんですよ。

だが、彼は黙認したんです。私は、これは非常に大きなことやと思います。つまり、彼はもう今までのやり方、幕府政治ではやっていけないということを考えたんだと思いますね。もちろん、そこにいろんな理由は考えられます。

憶測はつけられるんですけどね。それは置いて、とにかく慶喜が黙認したことで、クーデターがやられたんです。

その後、一二月一二日、三日後に、慶喜は会津藩主の容保とか桑名藩主の定敬なんかを連れて、大阪に下るんですね。

では、なぜ慶喜は、大阪に下ったのか。クーデターが行なわれた時、幕府側の人間も虚をつかれたし、会津藩、桑名藩も虚をつかれたから、怒り心頭になるんですよ。それはそうですよ。常識で考えたら、慶喜は大政奉還をしたんですよ。素晴らしいことをやっただんです。その慶喜を呼ばないで、排除して新政府を発足させたんです。これは怒るの当たり前ですよ。

だけれども、慶喜が冷静に会津藩とか桑名藩とかの連中を連れてこの大阪に下れたというのは、彼が知ってたからなんです。怒り狂うだろうということを事前に知ってたか

ら出来たんですよ。だから、歴史上の出来事というのは、そういう目で見ていくと、やっぱりそれなりの背景があるんですよ。それだけの準備期間があった。ただ、その三日間、王政復古クーデターが行なわれるまでの三日間は、慶喜は苦しかったでしょうね。恐らく、彼の人生の中で最も苦しんだ三日間だと思います。

ところで、慶喜一行の大阪には、プラス面とマイナス面が、もちろん、共にあるんです。プラス面は、下阪したことで有利に立てたことです。大阪にやってきて、この大阪の町を押さえたことによって、京都にいた大久保なんかに対して圧力をかけられたんです。例えば、京都への物資の移送を大阪で止めたら、京都はどうしようもないですよ。マイナス面もあります。マイナス面は幾つかあるんですけど、その一つは、やっぱり京都を離れたこと。京都にいたら、すぐにこの後、慶喜を新しい政府の議定につけようという動きが出てくるんですが、これに早急に応じられたことでしょう。ところが、大阪に出たために、京都へ行けなかったんですね。結局それで失敗したと言えます。会津藩とか桑名藩が、慶喜が京都に行く前に出発し、薩摩藩側に発砲されたわけです。それで鳥羽伏見戦争になった。

だから、歴史というのは、冷静に分析していくと物すごく面白いんですよ。一方的に、何かが、誰かに対して、有利になるとか不利になるということは、まず無いんですよ。物事というのは、必ずプラスの面とマイナスの面があるということなんです。私、歴史に学んだというのは、物事というのは複眼で見ないといけないということですが、まさにこの時もそうなんです。

それはともかく、二四日に朝議で慶喜を議定職にすることが決定されます。つまり、慶喜が早くも新政府で中心になることが決まる。これは、後藤象二郎に代表される土佐藩の連中らが、頑張った結果です。そして、このあとの出来事で私が非常に重要視しているのが、一二月二五日に江戸で発生した薩摩藩邸の焼き討ち事件です。これはどういう事件かと申しましたら、江戸の薩摩藩邸にいた浪士たちが、江戸市中で強盗行為をするんですね。それにたまりかねた幕府の依頼を受けて、江戸市中の取り締まりに当たっていた庄内藩兵らが薩摩藩邸に行き、浪士を引き渡せということになった。ついで、それを断られて戦争になるわけです。この情報が一二月五日に大目付の滝川具挙によって大阪に伝えられます。

私、この滝川なんかが果たした役割というのは大きいなと思うんですね。彼はもう頭にきてるわけです。薩摩藩の陰險なやり方に対して、頭にきてるわけですね。それで煽るんです。それまで大阪にいた幕臣なんかも、会津藩士も桑名藩士もみんな頭にきてるわけですよ。こんなこと、ここで申し上げるのもなんなんです。幕府側を追い込んでいった立役者の一人はもちろん大久保利通です。この大久保という男はかなり陰險な男です。私、日本の歴史でも、もしこの人物がいなかったら日本の歴史が大きく変わるきっかけを作った人物を一人挙げると言われたら、即座に大久保を挙げます。織田信長とか、いろんな人物が候補にありますが、彼らとは違って、大久保は文字どおり、下からはい上がってきて、歴史を大きく変えた人物だからです。

同時に、大久保という男は、日本人にはないキャラクターの持ち主で、非常に冷酷さを持った人物です。維新の革命が、いいか悪いかはともかく、ああいう形になったのは大久保のキャラクターによる所が大だと思えますね。だから、私、大久保というのは、日本の歴史を根底から変えた最大の立役者だと思ってるんですね。ただ、これもあえて申し上げます。そうかといって、「おまえ、大久保のこ

とを書くか」と言われたら、書きません。嫌いなんです。何故か。これも面白いもので、私も随分、これまで様々な本を書いて、その中でいろんな人間を取り上げていますけど、やっぱり嫌いな人間って書けないんですよ。この年齢になっても思うんですね。

私は、どこか憎めない愛嬌のある人間、あるいは負けた側の人間に対して興味があるんですね。私、勝者側に立ったこと、子供の時から無いんですよ。だから、同じく勝者側と見られている人間でも、西郷はまだ書けるんです。愛嬌があつて、駄目な所もありますしね。大久保は書けないんです。同じように言くと、やっぱり山縣有朋は書けないです。井上馨は書けそうな気がする。書きませんがね。

大久保の陰険さに話を戻します。大久保が、クーデター後、何を主張したかと言えば、新政府の費用を幕府が出せということなんです。こんな馬鹿なことって無いでしょう。幕府と全国の諸大名が共に出したらいいんですよ。その時、大久保が何と言ったかといえ、大政奉還をしたけれど、慶喜の今までのやり方からしたら信用できない、誠意を見せよということなんです。そのためには、幕府の領地を率先して差し出せと言うんですから、かなり陰険ですよ。

でも、そういう陰険なやり方が功を奏したんですね。頭に来たために、多くの人間が挑発に乗ったんです。もうこうなったら駄目ですよ。慶喜はやっぱ頭にきていたから、反薩摩的な動きは抑えないんですね。

それで結果的に、ナンバー3の所に入るんですけど、慶応四年一月初めに、会津、桑名両藩兵らが京都に向かう。

ついで、一月三日に薩摩側の発砲によって戦争が始まるわけですね。そして、この後、慶喜という人間が国民的総スカンを食らうことが起こる。慶喜は、一月六日に大阪城にいた幕府側の将兵を見捨てて、容保らとともに大阪城を脱出して江戸に逃げ帰ったんです。これが慶喜の不人気につながった。慶喜がこうした行動に出た背景については、時間の関係で今日は申し上げられません。とにかく帰る。

さあ、それで、大阪城にいた旧幕臣らも戦鬪意欲を一気に失って、ちりぢりとなる。ここに旧幕府側の運命は決し、慶喜も容保も朝敵となり敗者となっていく。この辺のことは皆さん御存じだと思うので、もうあえて何も申し上げません。

(2) 慶喜と会津藩の民衆との関わり方について

次に行きます。一時間かかって、ようやく、今日、一番お話ししたいところまでたどり着きました。それがレジュームの②の所ですが、なぜ会津藩や慶喜が負けたのかという問題です。もちろん、先ほど来、何度も申し上げたように、いろんな状況に応じて問題が発生し、その積み重ねの上で彼らは負けたんです。それが一番要因としては大きいけれど、それ以外に、私、最近、慶喜の伝記を書いている中で、彼らの民衆との関わり方、対民衆への視点に、やっぱり問題があったなということを改めて感じているんですね。そのことを、最後にちょっとお話ししたいと思います。

⑦と書きました所を見て下さい。民衆間における長州藩の人氣と、会津藩及び慶喜の不人気という所です。ところで、これはよく言われることですが、幕末期の一般民衆に物すごく長州藩は人氣あるんです。これはもう間違いないですね。

これに反して、会津藩、人氣ないですね。それから、慶喜も人氣ないです。四ページの③の注Cの所を見てもらえますか。三宅紹宣さんという広島大学の先生が、今年出した本⁽⁹⁾を送ってくださって、それを見ると、今日のこの

講演で使えるかなと思つた史料があつたので紹介します。

これは、いかに京都の民衆に長州藩が好かれてたかということが分かる史料です。

この史料中にある石見の国というのは今の鳥根県のことです。現在の鳥根県の在村医で、つまり村にいたお医者さんが書きとめた記録です。そこに、元治元年九月、いわゆる禁門の変といつて、長州藩が京都から追い出された、京都の町の大半が焼けるという、あの有名な出来事があつた後の京都のことが書かれています。長州おはぎが爆発的に売れる現象を生み出したことが書かれています。「御飯を丸め、赤豆を付け、盆に三つずつ入れ、長州おはぎ三十六文売り、負けなしと申して売り出し候由の所、長州様おはぎならば、いただきたき旨、殊のほか大流行」と。おはぎを盆に三つ並べて売つたのは、おはぎは長州藩の城下町であつた萩とかけてるんですね。そして、盆に三つならべたのは毛利家家紋の一字三星、三六文は長州藩公称石高の三六万石を象徴しているんです。

民衆というのは、こういう形で遊ぶんです。そういう知恵つてやっぱり凄いですね。面と向かつて露骨なことをしたら弾圧受ける可能性があるもので、こういう形で権力批判

とか、あるいは自分たちの意思を表示するんですね。また買うときの作法として、「値段まげくれ候へと云へば、いや負けぬと云ふを樂しみに諸人競ひ買ふ」と書いている。

わざとまげてくれ、値引きしてくれと言つて、これに対してまげんと言わせるようにした。つまり、長州が負けないということを重ね、公然と言わせるようにするものであつて、面白いと思つたので、ちよつと紹介しました。いずれにしても、このような形で、民衆は権力者を批判した。なかなか民衆というのは凄いなと思ひます。会津に関しては、こういった話は全く無いです。慶喜に対しても全く無いです。

では、なぜ長州藩の大衆間における人気が凄かつたかというと、これは長州藩の民衆対応のうまさ、民衆生活への配慮にもよると思ひます。長州藩というのは、この点で実によくまいます。これは今の山口県人にもつながるかもしれませんけど、非常に頭がいいというか、要領がいい県民性なのでしょね。

具体例を幾つか挙げます。まず、その一は禁門の変時のことです。天王山、御存じだと思ひますけど、JRの大山崎駅の近くにありますね。これは私、薩摩藩の史料を見

た時にあったものなんです、天王山近辺の農民は、禁門の変の時に物資の運搬のために長州藩に雇われたわけです。その時、長州藩は、ちゃんとバイト代を払うんですね。しかも多目に渡すんです。憎い対応ですね。

それから、物価高、米高への対応の仕方です。幕末期の民衆というのは、とにかく物価高、特に米価が上がるのに苦しめられるんですね。これはもう、今の我々よりもはるかに米を食べてますから、当時の人たちはね。ところが、幕末期というのは、もういろんな理由があって、米の値段が上がりますよ。例えば、長州征伐時には、藩が米を買い占めますから上がるし、それから貨幣の改鑄を幕府はするんですね。要するに、幕府は貨幣の質を落として、それだけ貨幣の量を増やします。そしたらもう、今の日本でも同じことが起こりますよ。貨幣の価値が下がると物の値段が上がる。そういうことがあって、物価高、特に米価の高騰というのが起こってくるわけです。

その時に、当時の民衆は、やっぱり交易のせいにするんですね。つまり、外国人と交易をし出してから我々の生活は悪くなったと受けとめる人が多いわけです。だから、攘夷を求める声が大きくなるんですね。民衆はそういう形で

外国人を追い払うということに物すごく共感をおぼえる。そうした背景があるわけです。

そういう民衆の心に、長州藩の口先ではない攘夷行動が素直に受け入れられた。実際、長州藩は攘夷を実行した。下関海峡を通過中のアメリカ船とくに砲撃をした。つまり、口先だけではなくて本当にやったじゃないか、長州藩はやったじゃないかという、そういう拍手喝采というのは、やっぱり大きいんですね。

それから、これは私、共感を持ってもらえるかどうか分りませんが、いつの時代にもある民衆の体制への批判心も大きかったと思います。民主制というのは、ある種、私健全だと思えます。やっぱり権力持つてる者に対するうさん臭さとか嫌悪感、これが非常にあります。そういう点では、この当時の体制、権力というのは、幕府、会津藩、それに慶喜なんですよ。

それから、宣伝工作、戦略面でのうまさというのがありますね。長州藩というのは、この点、実にうまい藩で、敵を一つに絞るんです。例えば、禁門の変後は、敵を会津藩に絞る。それから、第二次長州戦争の時は、九州方面の敵は小倉藩に絞る。これ以前、長州藩は小倉藩とトラブル起

こすんですね。この原因に関しては今日は説明できませんが、とにかく敵は小倉藩だけだというやり方をするんです。この敵を絞るやり方、何がうまいかと言ったら、他藩の連中が傍観者になるんです。

こうしたことってあるでしょう。いじめでも多分にそういうことがあると思います。当事者が、「俺が腹立つのはこいつだ」と言って、「おまえら関係ない」と言ったら、大抵の人はそこへ入っていきませんよ。何故かと言ったら、自分にとばかりが来るの怖いすもん。見て見ぬふりになるんです。

長州藩はそういうやり方を意図的にやっていくんですね。我々の敵は会津藩とか、あるいは小倉藩だと強く主張する。そうすると、もう私の戦い、「私戦」だから、俺たち関係ないということ、他藩は傍観者のな立場になるんです。見て見ぬふりをする。そういう形で、自分たちに有利な状況をつくっていくというやり方を長州藩は意図的にやっていきます。その点で、会津藩は純朴と言えば純朴ですけど、下手ですね。そういう藩としての戦略面のまずさみたいなものが、必要以上に会津藩、あるいは慶喜なんかを追い詰めていった面が、やっぱりあるということですね。

それから、これは、その裏返しなんですけど、民衆間における会津藩及び慶喜への反発といったことに話を移します。そうなった理由の一つは、攘夷派に対する会津藩の弾圧、取り調べがとにかく残酷だったことによります。会津藩主は京都守護職でしょう。これは権力持っているし、会津藩に対して非常に好意的な見方をすると、やっぱり強烈な職業意識を持っていたんです。自分たちが京都の治安を守る総責任者だという、その使命感というのは大きかったんですね。

ところが、そのためには金が要るんです。配下に新選組とか抱えるでしょう。手当が要るんです。会津藩にはそんな金はない。だから、相当ひどいことをしたようですね。これもあえて言います。侍分はまだいいんです。侍というのは教養があるんです。足軽以下の連中なんです、問題は。この連中がとにかく悪いんです。侍としてのプライドがないから、相当ひどいことをした。はつきり言います。京都の民衆にゆすり、たかりとか、そういうことをやってるようですね。だから、京都の民衆にひどく嫌われるんです。それから、京都守護職として、尊攘派の連中を捕まえて情報を収集しますよね。それも拷問にかけて吐かせたりし

ますね。それが酷かったようです。本当かどうか確かめようがないですけど、私が見てる範囲内の反幕側の史料中にある話を幾つか紹介します。

例えば、取り調べ中、蠟燭に火をつけて鼻に当てたというのがあります。これ、もちろん、「鼻が寒いから当てたろか」というんではないですよ。それから、病気の者が砂糖を求めたりすることがあったようです。これは、体が悪い時って、人間は甘いものを求めるようです。それで、砂糖を頼むと、火の起こったやつを、つまり、火でもう真っ赤にした砂糖を口の中に押しつけたとかね。非常に残酷な対応を時にしたようですね。話半分としても、こういう類いの史料が、私が見てる範囲では多いです。だから、相当ひどいことをした可能性はありますね。

ところが、こういう情報が周囲に洩れるわけです。民衆が支持する攘夷派に対して残酷な取り調べをしているらしいとのね。それに輪をかけることになったのが、禁門の変での放火です。禁門の変時に行なわれた放火の主たる実行者というのは、どうやら会津藩だったようです。史料④の注Dを見て下さい。幾つか挙げてみたんですけど、長州兵の立てこもった堺町門東の鷹司邸に向けて、会津藩や桑名

藩の兵が大砲を撃ち、火をかけたことによって、ドンドン焼けと呼ばれた大火が発生したということですね。

それから、次です。鷹司邸から燃え広がった火は、南は仏光寺、西は西洞院東側、東は寺町まで焼き尽くした。そして、二〇日朝に至り鎮火した。ついで二〇日午前過ぎに、残敵掃討のため、会津、彦根藩兵が大砲を撃ちかけたため、再び京都の町が焼けた。つまり、ここで示されているものは何かと云ったら、京都の町の大半が焼けた相当大きな原因は会津藩がつくったんだらうということ。この恨みが京都の民衆にはありますね。

慶喜のことに移ります。ナンバー3の所に書いてるんですけど、慶喜は大変な欧米の文物好きなんです。彼は、文明の持つ普遍的なものへの抜群の理解力と共感、興味を持つてる。慶喜という人は実に面白い人で、幕末期のあいう時期にあっても、普遍的なものに対する関心を持って、理解力があつたんですね。だから、早い段階で欧米の文物に関心を持た。すごいな、これは。

つまり、日本人とか欧米人に関係なく、これはすごいなと思えるものを認められる。そういう理解力を彼は持つてるんですね。彼、図抜けて持つてるんです。だから、彼は

かなり早い段階で開国論者になるんですね。その辺が会津藩と違うんです。会津藩は、原理原則にこだわって、攘夷主義者となった孝明天皇の考えに忠実であろうとしたんです。その点では非常に純な人たちの集まりです。

容保という人も、そういう面では非常に純真人ですよ。これもついでに言いますけど、私、容保に関して伝記を書かないかと出版社から言われたことあったんです。すぐ断りました。何故かといったら、物すごく純粋なんですけど、書き手としては面白くないんですよ。書き手としては複雑な人間が面白いんです。純粋な人であった、と一行で終わってしまうような人なんです。その点、慶喜は面白いですよ。宇宙人のような所があるから。その慶喜は、先程らい申し上げているように、早い段階で開国主義者になっていました。

ところが、当時の民衆は攘夷派なんです。つまり、自分たちの生活苦は外国と交易を始めてから、外国人と付き合い出ししてからそうなったと思ってますから、欧米好きの慶喜が許せないんです。また、慶喜という人が控え目であればいいのに、見るからに西洋人みたいな格好をして町なかを行くんですよ。そういう面での配慮の無さというのは、

慶喜がやっぱりエリートだったことを語っていますね。人の目が気にならないんです。もうちょっと遠慮したらいいのに、彼は、そこが坊ちゃんなんです。

そういう中で物すごい反発を買ってますね。それから、会津藩も慶喜もともに、民衆にとってはやっぱり体制そのものであった。こういう所からくる反発というのが、やはり大きかったと思いますね。この点に関連して、慶喜のことをもうちょっと言います。慶喜はとにかく民衆の動向に、無頓着なんです。私、慶喜の動向を見ていて非常に不思議なのは、むしろくちや民衆の動きに対して、鈍感なんです。いろんな史料を読んでいて、慶喜が、民衆がどう考えてるか、民衆がこう動いたとか、これに対してこういうふうな我々はやらないといけないとか、そういった旨の発言をしたことを記した史料って、私は少なくとも見てないんですよ。あるかもしれませんが……。

何故かなと思ったときに、慶喜の選良意識というかエリート意識、これとやはり固く結びついている人だと気づかされました。要するに、民衆というのは初めから統治の対象でしかない存在だったんじゃないかなとね。我々がきちんと政治をしたら、民衆はそれで喜ぶみたいな、民衆と

いうのは慶喜にとつてはそういう存在だったんでしょね。会津藩なんかも多分そうだと思います。そこが長州藩とかと、あるいは薩摩藩と違う所です。薩摩藩の連中も施し米とかやるんです。米の値段が上がってくると、米を民衆に配る。施し米を配る。

同時に、慶喜という人物は、幕府単独か、もしくはごく少数の藩との協力で政治をやつていこうとした人物だったのかなとも思います。そういう生き方をした人物だったから、民衆というものに対する配慮が極端に私は欠けてるような気がします。こうした慶喜のあり方が、民衆の動向への注視を怠らせた。

私はここ（レジュメ中）に書きましたように、これは政治家としては致命的な弱点だと思えます。いつの時代にも、私、やっぱり民衆のあり方とか民衆の動向に関心を払わない、それに対して何らかの形でリアクションを起こさない政治家あるいは政治勢力というのは、やっぱり減んでいくと思うんです。会津藩もそれに近いところがあったと思います。だから、政治家としての鈍感さとか政治勢力としての鈍感さみたいなのが、やっぱり敗者になっていく大きな要因になったんじゃないかと考えます。もつとも、多少弁

護しますと、慶喜とか容保というのはやっぱり高貴な生まれの人なんです。こういう人達にそういうものを期待しても無理だと思います。それは無理ですよ。

大久保とか西郷がなぜ勝者になっていったかというのと、あの連中は下からはい上がってきてるんです。やっぱり、はい上がってきた人間特有の強さ、つまり、下々のいろんなものが見えるというのは大きかったと思います。高貴な身分に生まれた人間は、どんなに自分は民衆のことがわかってるとか配慮していると言つたつて、恐らく言葉だけの問題でしょう。私は、多分、本当はわかつてないと思いますね。

だから、やっぱり下から上がってきた者の民衆との関わり方、そういったものが最後の最後に、勝負を決めたんじゃないかなという気がします。薩摩藩にしても長州藩にしても、民衆の支持を得ないとやっけていけないみたいな所があつて、それは施し米とか、民衆に対する対応の仕方とかで、ある程度うかがえると思いますね。

おわりに

いよいよ最後です。ナンバー2の二です。これからの課

題ということ、今の私が考えてることを申し上げます。

それは、健全で豊かな幕末史像を構築するには、ごく当たり前のことなんですけど、西南雄藩、幕府サイド、朝敵諸藩、中間派諸藩の動向、その全てを包み込んだ考察が必要であるということです。もっとも、この全てを包み込んだ考察というのは非常に難しいんです。「おまえがやれてるか」と言われたら、やれてません。ただ、やりたいなとは思っています。

何故かという、一つの観点から物を見ては駄目だということを感じることが、この頃、とくに多くなってきたんです。また、歴史学の面白さも、複眼的に物事を見れるかどうかに係っていると思いますね。私も年取ってきた中で、歴史をやっている有り難いなど、つくづく思うのは、いろんな経験が役立つんですね。頭の切れとかだけじゃないです。私、長年、歴史学をやっているのは、頭が良いにこしたことは無いけど、頭が良いなんてことは、別に大したことでは無いということです。

それよりも、だんだん人生経験を積み重ねる中で、その経験を率直に生かした方がはるかに良いなと思います。やっぱりするんですよ。経験を積み重ねていく中で、総

合的に物を見る、いろんな角度から物を見ていくということの重要さを感じるようになりました。それが、いろいろ批判はあるかと思いますが、時に個人の内面に踏み込んだ考察も必要だと考えることになりました。私、二年前に西郷隆盛に関する本を出したんですね。かなり思い切つて、西郷の内面にどンドン入っていったんです。もちろん、リスクが大いにあることは十分自覚して書きました。

これは、実は、西郷の伝記を書いた、ある若い研究者がこういうことを書いてたことに、私、反発したんです。それは自分の西郷伝は客観的にやったものだ、つまり、西郷の内面には入らないで客観的にやったと、こう書いていたんです。私、ムカツとしたんです。内面に入らないで理解できるのか。客観的って何だろうと思っただけです。私はあえて危険を冒して書きました。そのかわり批判は幾らでも受けるつもりでした。私には、リスクを冒さないと、やっぱり本当のことは理解できないとの考えがあったからです。ただ、有り難いことに、私はこの年になってくると、批判など、もうどうでもいいんです。何故かと言ったら、失うものが無いんです、別に。私が一番軽蔑するのは、若いのに守りの姿勢に終始している人間です。ボクシングで言

いましたら、チャレンジャー（挑戦者）なのに、ガードばかり固めてる選手がいますね。こいつは阿呆かと思うんですよ。こうした選手に限って、判定負けした時に、私がポイント勝っていたとか言います。チャレンジャーは、KOしないといけないんですよ、誰が見てもハッキリと判るかたちで……。やっぱリスクを冒さないとけないと思う。同じことですよ。やっぱリスクを冒さなきゃいけないんです。個人の内面に、時に踏み込んで分析しないといけない。ただ、その時に経験値（知）が出ると思いますが。人生経験を重ねる中で初めてわかってくることがある。そういう中でリスクを負っていく必要があるんじゃないか。それから、③に書きましたように、老病死の問題にも目を向ける必要がある。ここ（レジユメ中）に書きましたが、第二次世界大戦後の長い平和と繁栄の時代の中で、我々は余りにも老病死、生の問題は今までもやられてきてるんですけど、老病死の問題は考えなさ過ぎたんじゃないか。こういう気持ちをいま、私は物すごく持つてるんです。現在の歴史学が求められている大きな問題だと考えてます。ここであえて私的なことを言います。私、実はいま現在苦しめられてるんですが、潰瘍性大腸炎という病気があり

ます。私、その患者なんです。この病気のことで最近、物すごく落ち込んだことがありました。私の病気は、大腸に癌が見つかる、即、全摘なんです。普通の大腸癌だったら切つたらいいんですけど、私の病気の場合は転移しやすいんで、即全摘となります。それで、かい摘んで申し上げますと、内視鏡検査の結果、医師から大腸の全摘を勧められたんです。あまりに突然だったので、すごく落ちこみました。私、医師から告げられた瞬間、本当にこの年になって、若い人からしたら、「何やおまえ、その年まで生きてら十分やないか」と言われるかもしれませんが、落ち込んでしまっ、それから気持ちを立て直すまでに、かなりの時間がかかりました。

私が落ち込んだ理由の一つは、いとおいしいものとの別れがリアルに頭に浮かんだためです。自分にとって、いとおいしい人たちを残して、自分はあの世とやらへ旅立つのかと考えると、ひどくこたえました。ただ、その時、一つだけ良かったことがあります。慶喜の伝記を書くうえで、初めて理解できたことがあったのです。それは大阪から江戸に逃げ帰ったあとの慶喜の恐怖感にまつわるものです。大阪を逃亡した後の慶喜は朝敵だということで、追いつめられ

る。大久保なんかは慶喜の首を落とせと言うんですね。非常にクールな男ですから、腹を切らせとかね。

こうした中、江戸に逃げ帰った慶喜は、謹慎するとの考えを表明して助命を懇願するんです。関係者を通して新政府にね。その時、依頼された女性が二人います。天璋院って御存じですね。篤姫のことです。それから、徳川家茂夫人の和宮さんです。この二人が、慶喜から斡旋を依頼されるんです。ところが、慶喜から頼まれた時、どうも二人の女性は、慶喜の奥さんを通して、「あんたが腹切つたらいい」と言つたらしいんです。彼女らは、慶喜嫌いのうえ、とにかく徳川家の存続をまず第一に考えていますから、朝敵となった慶喜が腹切つたら一番いいわけです。それが、こうした申し出となった。

が、慶喜、若かつたんですね。死ぬのが嫌だつたんですね。この時、慶喜が発した言葉が残されています。「切腹は嫌と申し候」というのが、その言葉です。¹⁰この言葉に出会った時、私、急に慶喜に対して親近感が湧いたんです。程度は違うんですけど、死に直面した者としての親近感でしょうね。ついで、当時の慶喜の思いを深刻に受けとめることが出来たんです。彼は、それから、四月かな、……水

戸にお預けの身となるんですね。それまでの数カ月間というのは、慶喜は生きた心地がしなかったと思います。恥ずかしながら、私も多少死の恐怖に直面したので、慶喜の苦しみは物すごく理解できるようになりました。これは、私にとって、大変ありがたいことでした。

何故かといえば、私の今度の慶喜本では、当然伝記本ですから明治以後の慶喜のことも書くんですね。ところが、新しいネタがそれほどないんです。明治以後の慶喜に関しては、これまで多くの研究者はこう書いてるんです。明治以後の慶喜は、ああいう形で権力の座を追われてから、新しくできた新政府に対して、反政府的な気持ちを常に持つて生きた人だと。

もともと、私は、こうした見方には否定的でしたが、今回の自分の体験で考えが深まりました。慶喜は死の恐怖に直面した分、死一等を減ぜられた時に、「ああ、助かった」と心底喜びを感じたと思います。彼は、この時、いまだ三二歳ぐらいの青年です。生命が助かって、本当に有り難いと感じたと思います。

この時の慶喜の気持ちを考慮したら、私は間違いなく明治以後の慶喜は反政府的な気持ちなど持つて無かつただろ

うと想像します。明治期の慶喜は、広く知られているかどうか分かりませんが、ひたすら趣味の世界に生きるんです。しかし、それは、不満の捌け口であったとは思えません。趣味を、自分の楽しみとやはりしたんでしょう。なにしろ、慶喜は、政治的な動きを見せたら、えらいとばっちりを食いますからね。こうした慶喜の気持ち、初めてわかったような気がしました。だから、私は病気も含めて、どんなツライ体験も悪いことばかりでは無いと思ってるんです。

歴史学をやってみて、いろんな経験が一方的に不幸だと受けとめなくて済むようになったということが、この年まで生きてきて一番ありがたいなと思いますね。とにかく、老病死の問題も含めて、様々な問題に、これからも取り組むことが出来たらいいなと、現在、考えているところで。以上で、私の拙い話を終わります。今日はどうも長い時間、御静聴を有り難うございました。これからも皆様方が御多幸であることを本当に、この高いところからですけど、お祈りします。

〔付記一〕 本稿は二〇一三年五月一八日、大阪経済大学で行なわれた第一一回春季歴史講演会の講演内容を加除訂正し

たものである。

〔付記二〕 本講演のあと、『徳川慶喜（人物叢書）』（吉川弘文館、二〇一四年）と個人的な体験をもふまえて、老病死の問題を取り上げた著作を刊行しました。『老いと病でみる幕末維新―人びとはどのように生きたか―』（人文書院、二〇一四年）がそれです。両書に眼を通していただければ幸いです。

（1） 鹿児島では、第二次世界大戦時の戦災や個人（家）的な諸事情によるものを除くと、次の①～④の時点で藩関係の貴重な史料が大量に失われた。

① 幕末時（島津斉彬の遺言によって関連史料が焼却された際、これは、言うまでもなく、関係者に様々な影響が及ぶのを防止するための措置であった）

② 慶応三年一二月時（江戸の三田藩邸他および大阪藩邸が幕府側勢力によって焼き払われた際）

③ 明治五年時（大山綱良が鹿児島県令に就任した際。これは、大山が旧習を打破するため、旧藩関係の史料を意図的に焼却したとされる）

④ 明治一〇年時（西南戦争によって関係史料が焼失の憂き目を見た際）

（2） たとえば、早稲田大学図書館に所蔵され、のち活字となった『幕末会津藩往復文書』上・下巻（会津若松市発行、二〇〇〇年）などが、これに該当する。

（3） 日本史籍協会叢書一～六（東京大学出版会、一九八二

- 年)。
- (4) 『幕末政治と倒幕運動』(吉川弘文館、一九九五年)。
- (5) 『孝明天皇と「一会桑」——幕末・維新の新視点——』(文藝春秋〔新書〕、二〇〇二年)。本書は、のち若干の訂正と加筆を行なったうえで、『江戸幕府崩壊——孝明天皇と一会桑——』(講談社〔学術文庫〕、二〇一四年)として刊行された。
- (6) 『西郷隆盛と幕末維新の政局——体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変——』(ミネルヴァ書房、二〇一一年)。
- (7) 『経済史研究』第一六号(二〇一二年)所収。
- (8) 伴五十嗣郎編『松平春嶽未公刊書簡集』(思文閣出版、一九九一年)。
- (9) 三宅紹宣『幕長戦争』(吉川弘文館、二〇一三年)。
- (10) 慶応四年二月二日付大久保利通他宛海江田信義書簡『岩倉具視関係史料』下巻、思文閣出版、二〇一二年)。

(いえちか よしき・大阪経済大学経済学部教授)

「敗者の側から幕末維新史を振り返る」会津藩と徳川幕府はなぜ敗れたのか」

平成二十五年五月十八日(土) 於大阪経済大学フロンタル

家近 辰樹

1. 幕末史研究の推移と現在の研究状況

①長年の研究の特色(一九〇年代半ば頃まで)

②幕府側は敗けるべくして敗けたといふ見方が支配的であった(敗者側への低い評価が一貫していた)

③西南雄藩(薩摩・長州・土佐藩)の研究中心を占める

④敗者側(幕府・会津藩など扶藩論・中回派論)の研究は活発ではなかった

⑤会津藩(悪役・脇役として、主役の薩長藩の引き立て役をとめる)

⑥薩長両藩対徳川勢力という対立の図式で幕末を見よ(薩長同盟史観(薩長両藩の協力によって明治維新が成ったの見方)が根拠にある(注A))

⇒

(何故こういうことになったか?)

⑦幕末史研究からは、もう何も新しい成果は生まれないといった考え方が支配的であった(それだけ薩長同盟史観は常識のようになった)

⑧ブルクス主義(発展史観)の影響が大きかった(敗者ではなく、勝者に常に注目する)

⑨一九〇年代半ば頃以降の特色

⑩一會系勢力への注目(幕幕御守衛總督・探海防提督の一橋慶喜・京都守護職の松平容保、京都所司代の松平定敬の三者によって構成され、朝廷と協力することで、朝廷と幕府の結合を図る政治勢力であった)

⑪在京雄藩(京都・大坂に留まった老中・板倉勝静など)への注目

⑫朝廷や朝廷関係者への注目

⑬私の着目(主題)した点

⑭幕末期の会津藩は、脇役などではなく、主役しかも飛ぶ鳥の主張である

⑮会津藩の動向を軸にして分析しなければ、幕末史は理解できない(会津藩を筆頭

に敗者側の動向を正当に視野に入れる必要がある。勝者側には敗者の動向を視野に入れて動く)

⑯幕府・朝廷も会津藩・薩長同盟も一敗者ではない

④高久續之介氏の拙著への露評(注目)

⇒

NHKの大河ドラマで二十数年間に徳川慶喜・新撰組・会津藩を取り上げら

れるに至った背景

⑤二〇〇〇年頃以降の特色

⑦中間派諸藩・日和見諸藩(鳥取藩・加賀藩など)への注目

⑧徳川政権への注目(江戸の幕府や有馬の政治動向や思想構造の分析が始まる)

⑨東国諸藩や譜代大名・直参旗本層の表裏の解明

⑩現在の研究の特色(政局史中心の研究から確立定説が奪取。政治空間の問題など)

二「これからの課題(いまの私が考えていること)」

①健全で豊かな幕末史像を構築するには、西郷隆盛・幕府サイド・朝敵諸藩・中間派諸

藩の動向をすべて包みこむ必要が重要だ

②個人の内面に踏みこむ必要もある(菊次郎大庵の長い平和と繁栄の

③老・病・死の問題にも目を向ける必要がある(菊次郎大庵の長い平和と繁栄の

時代の中で、我々にはあまりにも老・病・死の問題をなすすぎたのではないのか。

現在の歴史学が求められている大きな問題に写す文)

三「なぜ会津藩や徳川(一橋)慶喜は敗北したのか？」

①確認しておきたい点

②鳥羽伏見戦争直前段階では、慶喜は勝利をほぼ手に入っていた

慶応三年十月十五日 大政奉還認可も慶喜親和の急上昇

十二月六日 慶喜「クレーク」叩き退けられるが黙殺した)

十二月九日 玉坂復讐クレーク

十二月十二日 下坂(下坂したく)「クレーク」面と「クレーク」面

十二月二十四日 朝敵で慶喜を露城監禁することを決定

十二月二十五日 江戸幕府諸藩協議会討幕事件

十二月晦日 大目付の瀬川武季によって事件が大阪に伝えられる。

ついで、瀬川が動揺したこともあり、事態は一気に

討藩に向かつて動き出す

慶応四年一月初め 会系藩兵が京都に向かう

一月三日

薩摩の叛徒によって戦争が始まる

一月六日

豊喜・容保ら(天保脱出)も朝敵となる

◎ 豊喜と会津藩の民衆との関わりについて

◎ 民衆間における長州藩の人氣と会津藩及び豊喜の人氣

◎ 長州藩の大衆間における人氣はどうか(注C)

◎ 長州藩の民衆対応のうまさ・民衆生活への配慮による(熊門の妾前、天王山近

辺の農民を物資の運搬のために雇入れる際でも、ちゃんどペイト代を、しか

も多目に渡す也)

◎ 物価(米)高に結びつく借しられれば知外交量に強い不満を持つ民衆の心には、

長州藩の口先ではない攘夷的行動が藩に受け容れられた

◎ いつの時代にもある民衆の体制(権)嫌いによる

◎ 宣伝工作・戦略面でのうまさ(敵をついにしぼり、周りを傍観させるといった

やり方)

◎ 民衆間における会津藩および豊喜の人氣

◎ 会津藩は、守護職として職務遂行に忠実なあまり、攘夷派に対する弾圧・取り

調が、とにかく残酷となつたらしい

◎ 熊門の妾時に行なわれた放火の主な発行者としての会津藩(注D)

◎ 豊喜(大変な吹米の文物好き、文明の普遍なものへの抜群の理解力と共

感・興味)と民衆の区別

◎ 会津藩も豊喜とともに民衆にとっては何物か無頓着に思えて

◎ 豊喜はとにかく民衆の動向に何故か無頓着に思えて

◎ 豊喜の運良意識・愚民観によるか(民衆は初めから統治の対象を出ない存在

だったらしい)

◎ 豊喜は、幕府軍独が、もしくは、つくぬ教諭の協力で政治をやつていこう

とした人物だったか?

理由(背景)

◎ こうした豊喜のあり方が民衆の動向への注視を促した(これは、政治家

としては致命的な弱点といえる)

①注A

一六〇〇年関原の戦いも敗北した薩摩・長州の両藩（つか機会があったら徳川幕府を倒そうと、二百数十年間、チャンスをうかがっていた）一八五三年にペリが来航して以降、開国が鎖国をかめくつて動乱状態となる一八六〇年代初めに、薩・長両藩が中央政局へ参上してぐる上陣をなひ立てずで両藩が対立するようになる一八六六年、坂本龍馬の仲介で薩長同盟（実務同盟）が成立し薩長両藩による武力倒幕へ向けての活動が一八六八年徳川幕府の打倒に成功

②注B『経世史研究』第一六号、二〇三年

これらの作品から、家近作品の題意に多くの名を手指摘しておこう。第一は、氏が船としてひたすら「愚直」な史料眺みから止まらぬものであるということである（氏の「愚直」を示すエピソードには必ず省略する）第二は、多様なペトル氏（氏の言葉によれば「獨脚的な視点」）で歴史を掘くという方法である。これまでの作品や言はば、江戸の幕府と屏風の「会表」の違い、国許の宗廟と京都の宗廟の類似という視点、つまり幕府や藩を一枚端では見ないという視点に表れている。第三は、御身大で人物を描こうとする姿勢（氏の表現では「英雄史観を描く」）である。たとえは、徳川幕府を、朝敵双方にまたがる出自からくる朝廷を尊崇しながら幕府の中にある、う風細で冷めた男、徳川家に気を遣う男として描き、孝明天皇を、豪胆な義経玉藻将軍になく、周囲への配慮を極しさをかき、重大な決断を迫られて苦悩する男として描いた。

③注C（石見国の在村医の書き留めた記録「三空院」重長戦争『吉川弘文館、二〇三年）（治正元年）九月に京都で「長州おぼき」が爆発的に死に乱象を生み出した。これは「御飯を丸め赤豆を付、盆に三つずつ入れ、長州おぼき三六文売、無償と申て赤出候由の所、長州様おぼきならは轍き度旨、殊の外大流行」とおぼきを盆に三つならて売るもので、おぼきは長州藩城下町の萩、盆に三つならるのは吾妻家紋の「三三三三」三六文は長州藩公称石高の三六万石を象徴している。

また言うときの作法として、「置殿まけくれ候へと云へば、いかにめと三を獲しみに諸ノ難び買合のようにな、わざと「まけくれ」(輔引きしてくれ)といひ、これに知して「まけん」と言わせるようになして、長州は負けないことを公然と言わせようにするもの

であった。

④注D

- ◎長州兵のたてこもった城下町に鷹司邸に向けて、金鐘番や奉書等の兵が大砲を撃ち、火をかけたことにより「アトアト焼け」と呼ばれた大塚を指した。
- ◎鷹司邸から燃え広がった火は、南仏光寺、西は西洞院東側、東は寺町まで焼けつくした。二十日朝にいたり鎮火。
- ◎二十日午前過ぎ、義経藩討のため津、彦根藩兵が、大砲を撃ちかけたため、再び京都の街が炎上した。